



京大広報

No. 512

1997. 4

目次

〈大学の動き〉

- ウブサラ大学との学術交流…………… 210
- 部局長の交替等…………… 210
- ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
竣工・創設記念式典…………… 212

〈部局の動き〉

- 事務局消防訓練行われる…………… 213

〈日誌〉…………… 213

〈訃報〉…………… 213

〈保健コーナー〉

- ヒトの歯とあごはどこへいく
一進化はつらいよ…………… 216

〈京都大学の百年（第24回）〉

- 京大における中庭…………… 218

〈洛書〉

- 百周年一環境にも配慮を— 小田 順一…………… 219

〈資料〉

- 平成8年度京都大学後援会助成金
交付者一覧…………… 220
- 平成8年度教育改善推進費（学長裁量経費）
による研究課題…………… 223

〈公開講座〉

- 京都大学春秋講義（春季講座）の開催…………… 228

〈話題〉

- 京都地域留学生交流推進協議会総会を開催… 228



ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー創設記念式典・講演会



ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー竣工式でテープカットをする関係者
—関連記事本文212ページ—

大学の動き

ウプサラ大学との学術交流

本学とスウェーデン王国ウプサラ大学との「学術交流に関する一般的覚書」が、平成9年2月18日に交換された。

同大学との学術交流の推進については、国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No.363）にそって検討が進められてきたが、このたび「覚書」を交換することになったものである。

ウプサラ大学は、1477年に創立された歴史のある総合大学で、神学部、法学部、医学部、芸術学部、

社会科学部、理学部及び薬学部の7学部のほか、ガン研究所、生物医学センター等の附属施設を擁している。

また、図書館は、1620年に創設の中央図書館のほか、18の学部附属図書館がある。

教員数 1,600人、学生数 21,000人。

蔵書数 500万部

《注》教員数、学生数及び蔵書数の出典は、THE WORLD OF LEARNING 1997, 47th Edition.

部局長の交替等

(新任)

附属図書館長

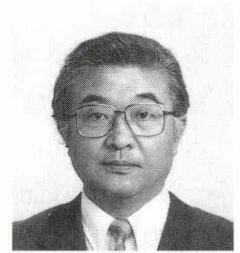
長尾 真附属図書館長の辞任に伴い、その後任として万波通彦工学研究科教授（メゾスコピック物性工学講座担当）が4月1日附属図書館長に任命された。任期は平成10年3月31日までである。



万波通彦教授

理学研究科長・理学部長

鎮西清高理学研究科長・理学部長の任期満了に伴い、その後任として尾池和夫理学研究科教授（固体地球物理学講座担当）が4月1日理学研究科長・理学部長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



尾池和夫教授

法学研究科長・法学部長

村松岐夫法学研究科長・法学部長の任期満了に伴い、その後任として田中成明法学研究科教授（法理学講座担当）が4月1日法学研究科長・法学部長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



田中成明教授

医学部附属病院長

吉田 修医学部附属病院長の任期満了に伴い、その後任として本田孔士医学研究科教授（感覚運動系病態学講座担当）が4月1日医学部附属病院長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



本田孔士教授

経済学研究科長・経済学部長

菊池光造経済学部長の任期満了に伴い、その後任として野澤正徳経済学研究科教授（統計・情報分析講座担当）が、4月1日経済学研究科長・経済学部長に任命された。任期は平成10年3月31日までである。



野澤正徳教授

工学研究科長・工学部長

曾我直弘工学研究科長・工学部長の任期満了に伴い、その後任として長尾 真工学研究科教授（通信情報工学講座担当）が4月1日工学研究科長・工学部長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



長尾 真教授

農学部附属演習林長

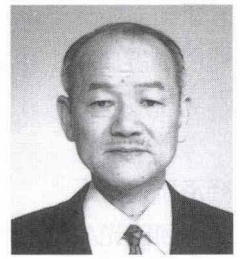
神崎康一農学部附属演習林長の任期満了に伴い、その後任として川那辺三郎農学研究科教授（森林生産学講座担当）が4月1日農学部附属演習林長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



川那辺三郎教授

放射線生物研究センター長

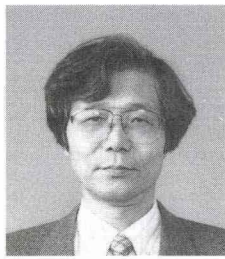
佐々木正夫放射線生物研究センター長の任期満了に伴い、その後任として池永満生放射線生物研究センター教授（放射線システム生物学研究部門担当）が4月1日放射線生物研究センター長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



池永満生教授

人文科学研究所長

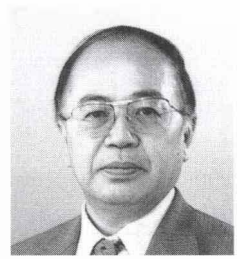
阪上 孝人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として山本有造人文科学研究所教授（日本社会研究部門担当）が4月1日人文科学研究所長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



山本有造教授

総合博物館長

総合博物館の新設に伴い、河野昭一理学研究科教授（進化植物科学講座担当）が4月1日総合博物館長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



河野昭一教授

胸部疾患研究所長

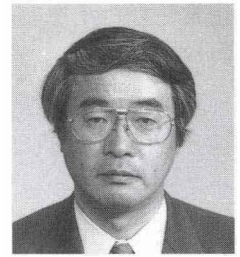
人見滋樹胸部疾患研究所長の任期満了に伴い、その後任として泉 孝英胸部疾患研究所教授（環境生態学研究部門担当）が4月1日胸部疾患研究所長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



泉 孝英教授

総合情報メディアセンター長

総合情報メディアセンターの新設に伴い、富田眞治工学研究科教授（計算機工学講座担当）が4月1日総合情報メディアセンター長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



富田眞治教授

基礎物理学研究所長

長岡洋介基礎物理学研究所長の任期満了に伴い、その後任として益川敏英基礎物理学研究所教授（素粒子論研究部門担当）が4月1日基礎物理学研究所長に任命された。任期は平成11年3月31日までである。



益川敏英教授

(再任)**文学研究科長・文学部長**

喜志哲雄文学研究科教授（欧米語学・欧米文学講座担当）が4月1日文学研究科長・文学部長に再任された。任期は平成10年3月31日までである。

木質科学研究所長

栗原正章木質科学研究所教授（木質バイオマス研究部門担当）が4月1日木質科学研究所長に再任された。任期は平成11年3月31日までである。

ウイルス研究所長

伊藤嘉明ウイルス研究所教授（がんウイルス研究部門担当）が4月1日ウイルス研究所長に再任された。任期は平成11年3月31日までである。

経済研究所長

佐和隆光エネルギー科学研究科教授（社会エネルギー科学講座担当）が4月1日経済研究所長に再任された。任期は平成11年3月31日までである。

原子炉実験所長

前田 豊原子炉実験所教授（応用原子核科学研究部門担当）が4月2日原子炉実験所長に再任された。任期は平成11年3月31日までである。

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー竣工・創設記念式典

3月15日(土)午後1時30分から、本学本部構内に新たに設置されたベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）で、創設と建物竣工に伴う記念式典が、新設された建物の披露を兼ねて行われた。

竣工式では、高 為重 文部省大臣官房審議官、藤島安之 通商産業省大臣官房審議官、井村裕夫 総長、丸山和博 京都工芸繊維大学長、山野 大 関西サイエンス・フォーラム理事長、松重和美 VBL施設長及び黒川 征 事務局長が、テープカットを行った後、施設見学が行われた。

京大会館に場所を移した記念式典では、学内外の産官学関係者約180名が参加し、井村総長の式辞に続き、松重VBL施設長の挨拶、安部矩敏 施設部長の工事経過説明の後、来賓の高審議官、丸山京工織大学長、藤島審議官の祝辞が述べられ、祝電披露の後、松重VBL施設長から施工関係企業に感謝状の贈呈が行われた。

式典に引き続き行われた講演会では、堀場雅夫 堀場製作所会長により、「ベンチャー魂」と題して、経験に裏付けられた知識を感じさせるユーモア溢れる記念講演が行われた。

祝賀会では、曾我直弘 工学研究科長からの挨拶、近藤文治 応用科学研究所長、山野関西サイエンス・フォーラム理事長からの祝辞に続き、江刺正喜

東北大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長の発声で乾杯があり、学内外の関係者を交えて、和やかに歓談した。

（施設の紹介は、次号に掲載予定）

[ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー]

部局の動き

事務局消防訓練行われる

春の火災予防期間中の3月6日(木)に事務局消防計画に基づく事務局職員の防火教育及び消防訓練が午後3時から約1時間にわたり左京消防署の指導と協力を得て行われた。

訓練は、総勢150名の参加のもと消防車2台、はしご車1台及びヘリコプター1機が出動し事務局本館1階南側情報処理課室からの出火を想定し、経理部情報処理課永田課員の「訓練火事です」との通報により始まり通報連絡、初期消火、避難誘導、物品搬出、警備誘導、救護等の一連の総合訓練が行われた。

引き続き、左京消防署員の指導のもと消火器の放



射訓練が行われた。

(経理部)

日誌

1997年2月1日～2月28日

2月3日 発明審議委員会

12日 大韓民国ソウル国立大学 崔 松和 副学長他3名来学、総長及び関係教官と懇談

18日 評議会

18日 京都大学後援会助成事業検討委員会

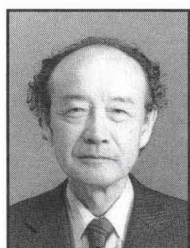
〃 平成8年度京都大学技術職員研修(第17回)(20日まで)

25日 入学者選抜学力試験(前期日程試験)(26日まで)

訃報

畠山伊佐男

名誉教授



本学名誉教授 畠山伊佐男先生は、2月18日逝去された。享年87。

先生は、昭和8年京都帝国大学農学部林学科を卒業、続いて同大学理学部植物学科に入学、同11年卒業後、同大学院を経て、京都帝国大学理学部副手、講師、京都大学理学部助教授、昭和39年同教授に就任、同40年より8年間にわたり同大学理学部附属植物生態研究施設長を併任、同48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、植物生態研究施設の創設に尽力され、同施設設立後は部門の増設、ノートバイオトロンをはじめとする実験設備の充実、植物園の整備につとめ、

今日の生態学研究センターへの発展の基礎を築かれた。退官後昭和61年まで、京都市立看護短期大学教授として、学生の教育と看護教官の研究指導に努められた。

先生は、植物の水分生理学、生理生態学に関する数多くの優れた研究実績を残され、この分野の発展に大いに寄与された。

先生はまた日本植物学会、日本生物環境調節学会の評議員、文部省学術審議会専門委員等を歴任され、学会・学術の発展に尽くされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学研究科)

東 慎之介 名誉教授



本学名誉教授 東 慎之介先生は、2月19日逝去された。享年73。

先生は、昭和21年京都帝国大学理学部化学科を卒業、同学部副手、助手の後、京都大学吉田分校助手に配置換、同助教授を経て、同38年教養部助教授、同40年同教授、同60年舞鶴工業高等専門学校長に就任、平成4年3月停年により退官された。この間、昭和46年4月から同48年3月まで京都大学評議員、同48年4月から同49年3月まで教養部長を務められ、同60年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

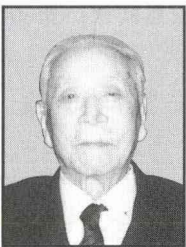
先生のご専門は分析化学、とりわけトリウムの分析化学研究を主眼にして、その微量分析法を独自に

開発し、「海水中のトリウムの分析化学」を完成された。近年は「湿式法による遷移金属酸化物の合成と物性に関する研究」の一環として「マンガン酸化物の結晶構造解析とその磁気的性質」の研究を進められ、その成果は新しい磁性体の新規合成法の提案のみならず、海底鉱物資源であるマンガン瘤の成因を解明する糸口として注目されている。また先生は、教養課程教育に先取的に取り組み、大学基準協会では一般教育研究委員会委員として大学制度の検討等に参画された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

若林 光夫 名誉教授



本学名誉教授 若林 光夫先生は、2月21日逝去された。享年91。

先生は、昭和5年京都帝国大学文学部を卒業、第三高等学校講師、同教授、西洋文化研究所員、龍谷大学予科講師、京都大学附属医学専門部講師、浪速大学講師、同教授を経て、昭和26年京都大学吉田分校教授に就任、同38年京都大学教養部に配置換となり、同43年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和41年4月から同42年3月まで評議員として、本学の管理運営に貢献された。本学退官後、同43年4月から同54年3月ま

で京都産業大学教授を務められた。

先生のご専門はドイツ語、ドイツ文学で、特にヘルダーを中心としてゲーテに至る十八世紀文学思潮と現代文学、特にワッゲルル、ハウスマン、カロッサなど敬虔なドイツ精神の内面性を特徴とする諸作家の研究のほかに、翻訳等の分野においても数多くの優れた業績を残された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

神野 博 名誉教授



本学名誉教授 神野 博先生は、2月21日逝去された。享年70。

先生は、昭和23年京都大学工学部工業化学科を卒業、同大学工学部助教授を経て同44年教授に就任、応用固体化学講座を担当された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けら

れた。この間、昭和57年10月から同59年3月まで学生部長を、同59年11月から同61年11月まで評議員を、また同62年4月から平成元年3月まで工学部長を歴任され大学の管理運営に貢献された。さらに実験廃液処理装置の設置に尽力し、環境保全センターの創設に多大の貢献をされた。

本学退官後は、上智大学理工学部教授を経て、平成5年5月からは福井大学長を務めておられた。

先生は、セラミック材料化学、中でも窯炉における燃焼反応過程、燃焼条件とセラミックスの物性の関係、およびセラミックスの破壊機構に関する研究において優れた研究業績を残された。

また、日本燃焼研究会、日本材料学会および日本

セラミックス協会などにおいて、会長、理事、支部長の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科)

磯江 景孜 名誉教授



本学名誉教授 磯江景孜先生は、2月22日逝去された。享年65。

先生は、昭和29年京都大学文学部を卒業後、同大学院文学研究科博士課程で学ばれた後、同37年名城大学法商学部専任講師、同43年立命館大学文学部助教授、同47年より教授を経て、同48年京都大学教養部助教授に就任、同58年同教授に昇任、平成4年総合人間学部教授に配置換、同7年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、大阪工業大学教授に就任されていた。

学会においては、関西哲学会委員、日本哲学会年報『哲学』編集委員、文部省学術審議会専門委員等として活躍された。

先生は、カントの哲学を研究することから出発し、イギリス哲学研究や歴史哲学、現象学、解釈学、マルクス主義思想に関わる近現代のドイツ哲学を研究されたが、なかでも、特筆すべき仕事は、難解を極めるハーマン哲学の本邦で最初の本格的な研究をされた。その研究の一端はドイツの学会にも紹介されている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

森下 正明 名誉教授



本学名誉教授 森下正明先生は、2月26日逝去された。享年84。

先生は、昭和10年京都帝国大学農学部農林生物学科を卒業し、京都帝国大学副手、京都府立嵯峨野高等女学校及び鴨沂高等学校教諭、九州大学助教授を経て、昭和40年京都大学教授に就任、理学部動物学動物生理生態学講座を担当し、同51年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、理学部附属瀬戸臨海実験所長として管理運営面に貢献された。

先生の研究は生態学の多くの分野にわたり、いずれも高い評価を受けている。中でも次の業績は内外の学会から賞賛されている。まず、ヒメアメンボを材料とした研究で、野外の動物個体群の分散が密度の上昇とともに高まることを初めて実証し、その後の個体群生態学の発展に大きく貢献された。次に、

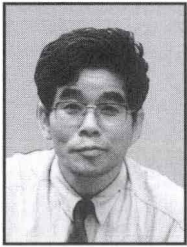
アリジゴクを材料として、生物の環境に対する反応と個体群密度を一元的に理解し、複雑な環境を生物の密度に換算して評価する画期的な理論「環境密度理論」を構築された。さらに、個体群と群集の研究にとって極めて汎用性の高い一連の指数を開発された。特に個体群密度に左右されず、特定の分布型も前提としない集中度指数と、群集間の類似性を客観的に評価する指数は世界中で使われている。これらの業績により、昭和39年度日本動物学会賞を受賞された。

また、先生は、日本生態学会全国委員・同編集委員・同学会九州地区及び近畿地区会長、個体群生態学会会長を務められた。また京都府文化財専門委員、京都市公害対策審議会委員なども歴任し、その専門の見識を発揮して社会に大きな貢献をされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学研究科)

内海 恭三 農学部教授



農学部教授 内海恭三先生は、3月10日逝去された。享年53。

先生は、昭和42年京都大学農学部を卒業、同大学院農学研究科で学ばれた後、岡山大学農学部助手、京都大学農学部助教授を経て、平成4年教授に就任された。

先生は畜産学、中でも家畜繁殖学に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与された。特に最近では、優良形質を持つ家畜の効率的増産システムの確立を目標においた胚移植に関する研究を、基礎研究から家畜大動物を用いた応用研究

まで幅広く積極的に取り組まれ、哺乳動物胚の凍結保存、胚の性判別、核移植胚の作出など国際的評価を受ける優れた研究成果を発表した。主な著書に、『哺乳動物の初期発生』、『凍結保存』等がある。

また、先生は、畜産分野のみならず医学分野においても内外の学界の発展に大きく寄与され、哺乳動物卵子学会の理事、胚移植研究会の事務局長等の要職を歴任された。学部および大学院において学生の研究・教育指導にも熱心に取り組まれ、各界に幾多の有為の人材を送り出された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(農学研究科)

柴田 實 名誉教授



本学名誉教授 柴田 實先生は、3月16日逝去された。享年91。

先生は、昭和5年京都帝国大学文学部を卒業後、京都帝国大学助手、助教授を経て、昭和25年京都大学教授（吉田分校）に就任、同38年教養部に配置換え、同44年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和31年4月から同33年4月附属図書館商議員、同33年6月から同35年6月評議員、同38年6月から同40年6月まで教養部長を歴任され、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、関西大学、仏教大学の教授を歴任された。

先生のご専門は日本文化史・民俗学で、中でも中世の庶民信仰や神祇信仰の研究において数多くの優れた研究業績を残された。特に祇園御霊会や八幡神の研究、六波羅蜜寺や壬生寺など、各地の民俗の調査報告は、日本の庶民信仰の研究の上で、欠くべからざるものとなっている。さらに、近世心学の創始者石田梅岩の著作などを収集・公刊し、心学を体系的・総合的に跡付けられた。主な著書に『中世庶民信仰の研究』、『日本庶民信仰史』、『石田梅岩全集』、『梅岩とその門流』等がある。

これらの研究活動、学術上の貢献に対し、昭和51年には勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

保健コーナー

ヒトの歯とあごはどこへいく？ —進化はつらいよ—

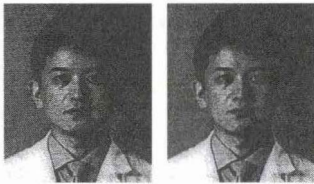
歯は脊椎動物が発達させた摂食のための道具であり、哺乳類である人間にとっても生きて行く上で必要不可欠なものであることに疑う余地はない。ところがどうも最近、ヒトの歯と、歯を取り巻く環境が大きく様変わりしようとしているらしい。診療所を訪れる学生たちの口の中を覗きながら、ヒトと歯の

関係についてふと思ひ浮かぶことがあった。

1. 現代人のあご —尖ったあごは流行の顔—

ヒトが類人猿と袂を分かってから約400万年になると言われる。旧人と呼ばれる人類の始祖が荒野を駆け巡っていた時代は長く、現代のわれわれにちかひ新人が登場するのはほんの3万年ほど前のことで

ある。火を使った調理による食生活の急速な変化はヒトのあごと歯に重大な影響をおよぼし、順当な進化の流れを無視した激変を迫ることになった。さらに加工食品に親しみ、噛み砕くのに強い力を必要としなくなったため、現代人のあごの骨は華奢になり、頭蓋骨の発達とは反比例して薄く小さくなっていくのである。日本顔学会を主宰する東大の原島 博教授によると、未来の日本人の平均顔はさらにあごが細くなって瓜ざね様になっていくのだそうだ。未来人にとってみればわれわれのあごはサルに近くて原始的だ、ということになるのかもしれない。(写真参照)



2. 現代人の歯 ー親知らずはヒトの気もしらずー

歯はどうかというと進化にしたがって数が減る傾向にあるが、あごの退化とは少々タイミングがずれているらしい。人間の歯は親知らずを入れて32本が基本である。ところがこの親知らず、生えたくてもあごにその余地がないため横向きに生えたり、骨に埋もれたままになる場合が多い。別に親知らずが生えてなくても日常生活に困るわけではないのだし、中途半端に頭をだすと炎症の原因になるのだから、考えてみればこんな迷惑な話はない。遺伝子ももうちょっと気を利かせて、必要ない組織ならはじめから作らなければいいであろうし、作ったのならきちんと使えるように環境を整えておくのがスジというものである。DNAへの八つ当たりはこの辺にしておくが、食生活の因果応報はまだまだ続く。

3. 歯ならびとあごの変形 ー人間、見た目が肝心?ー

八重歯のサルがかわいいかどうか、あまりお目にかかったことがないので知らないが、どうやら歯ならびが悪いというのは人間の専売特許のようだ。あごの退化に追いつけず歯の数、大きさにアンバランスが生じて、結果としてきれいに歯がならびきらなくなってしまうのである。「しよせん見かけの問題だ」とか「个性的でかわいいんじゃない?」という意見もあるかもしれないが、きれいに整った歯ならびの人とそうでない人とを比べて機能的に差が生じ

ないはずがない。うまく噛めないのは当然のことながら子音の発音にも悪影響をおよぼすし、三本の歯が肩寄せ合った中心部分などは細菌がよっぽど自重でもしない限り、魔の巣窟、虫歯も歯周病も何でもありの状態である。また先に登場したか細いあごの骨と歯ならびの悪さが合併するとどうなるであろうか。顔の筋骨格系バランスがくずれ、顔貌に与える影響は無視できないものになる。受け口などの前後的なあごのずれや前歯が噛み合わない、顔が左右非対称といった骨格の異常を訴えて相談に訪れる人が増えている。顔は社会に接する大事なインターフェイスである。痛みこそ伴わないものの、顎変形症は当人にとって深刻な病気なのだ。

4. あごが痛い ーポピュラーになった顎関節症ー

まともにならない歯、退化してゆくあごに追い打ちをかけるのは誰もが見舞われる現代病、ストレスである。人間は緊張を感じている際には歯を噛みしめているものだが、寝ている間にもものすごい力でくいしばっていることがある。歯ぎしりもその一種であり、起きている時に受けたストレスを一挙に解消しようとしているかのようだ。朝起きてどうも口が開きにくい、あごがだるい、音がするという症状を経験したことはないだろうか?それは増加の一途をたどる病気、顎関節症の一種かもしれない。有名な女性歌手がこの病気のために休養宣言をして話題になったことがあるように、進行した場合には食事や会話に不自由を感じるほど口が開けられなくなってくる。原因はストレスだけではなくて噛み合わせが関わる場合も多い。単純に言えばうまく噛めないためにあごの関節に負担がかかってしまうのである。治療に使うスプリントというマウスピースのようなものがスポーツ選手の運動能力向上に役立つことが知られているが、関節への過重負担を防御しつつグッと噛めることがキーポイントのようだ。最近では顎変形症に顎関節症を合併する人が多いことがわかってきた。普通の高校生の20%は顎関節症にかかっているという報告があるが、下顎前突や非対称の人の場合はこれが半数ちかくなってしまふ。

やれやれ、さまざまなひずみが歯とあごに集中して現れてきているようだ。駆け足で進んでいく社会に、生物としての人間はついていけないのかもしれない。(保健診療所 横江義彦)

京都大学の百年（第24回）

京大における中庭

写真1は京大の本部構内にかつてあった法科大学の庭園である（1910年代）。この庭園が、やがて建てられた法経の「赤レンガ」の中庭に継承されることになる。今では京大でも数少なくなった中庭の光景だが、歴史的に見ると戦前の帝国大学にはよく見られたものであり、京大もその例外ではなかった。

戦前の高等教育機関の建物配置にはいくつかの型があるという（以下の記述は宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会、1989年、を参考にした）。代表的なものは並列型と呼ばれるプランである。これは細長い建物を数棟平行に配置したもので、それぞれの建物を廊下で結んでいることが多い。この型ならば、すべての教室を南面させることが可能であり、したがって、当時学校建築上議論になっていた日照条件を主とした衛生上の観点から見ても適切なものといえた。図1の第四高等学校はその代表であり、京大の正面に位置していた第三高等学校（図2）も並列型であった。この型は、敷地面積が比較的小さくてすむ合理性をもち、特に大正期に限られた予算内で地方に急速に増設される旧制高等学校や専門学校はほとんどが並列型をとり、建築そのものも木造で装飾性を排して画一化していくことになる。

他方、もうひとつ中庭型と呼ばれるプランもある。



図1

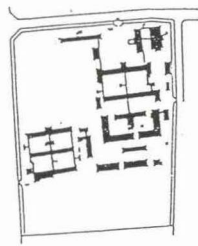


図2

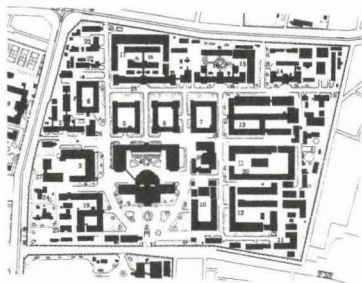


図3



写真1

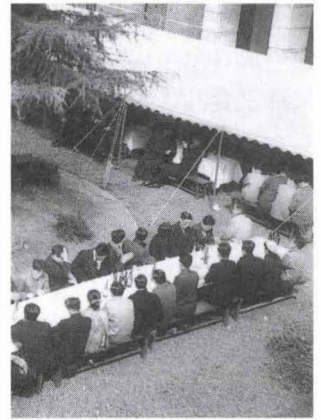


写真2

これは建築物が口の字や日の字あるいはコの字の形をとり、その中央に静的空間である（つまり通路等を主たる役割とはしない）中庭を配するものである。この型は、並列型とは逆に衛生面や合理性の点からは必ずしも適切ではないが、建物を四囲から観察することができ、その量感や装飾性を強調することが可能である。中庭型は、ある程度敷地や予算に余裕がなければ不可能であり、そのためか主に帝国大学で見られる型である。

京大においても、本格的に本部構内の整備が始まった大正期あたりから戦後の1960年前後にかけて、重厚な煉瓦造りやコンクリート造りの中庭型の建築が目立ち始める。特に構内中央には、西から文学部陳列館（一部現存）、法経赤レンガ（現存せず）、文学部本館（一部現存）、文学部東館（現存）と中庭を擁する建築が建ち並んだ（図3は1965年の本部構内の建物配置図）。これらの中庭は整備されて木立ちや小噴水などが置かれ、学生たちの憩いの場となったり、教室や学会の懇親会なども開かれるなど、閉鎖的ではあるが文字通り「遊び」のスペースとして大学生生活の重要な要素となっていた（写真2は1957年の文学部本館中庭における懇親会の様子）。確かに中庭型の建築は、帝国大学の権威性を感じさせる一面も持つが、一方では学術研究に不可欠な「余裕」ももたらしたのではないか、という気もする。大学のような研究教育機関における空間の重要性は、形としては表れにくいだが、歴史的にしっかりと考えてみる必要があるであろう。

（百年史編集史料室）

洛書

百周年 —環境にも配慮を—

小田 順一

おいでませ山口へのキャッチフレーズで知られる山口がディスカバー・ジャパンの1位に選ばれたそう。めでたいことである。とは申せ私は山口県民でもなければその回し者でもない。ただ縁あってこれまでに山口大学を訪れる機会には恵まれて来た。ご承知のように山口大学は湯田温泉街のはずれに位置していることから大学にお邪魔した時は、何時もこの温泉でストレスの解消をさせて頂いている。そんな訳で訪れる度毎に近辺の町並が新しく様変わりしていることに気付いていたが、今回多くの人から町々が大変清潔になり住み易くなったことを異口同音に聞かされた。県内の美化は産業の少ない山口県が観光客誘致のために当局の音頭で始めたものと思われるが、それが県民の自覚を呼び起こし、今では各自が清潔なことを誇りとさえしていることは驚きである。とかく日本人は環境改善には苦手な人種であると言われる中で、山口のケースは、環境問題に関しては社会の1人1人の取り組みが如何に大切であるかを物語っている。

そこで、気になるのが我が大学の何処か雑然としたところである。その原因の1つが構内に駐車している多くの車であり、付随して駐禁のためにやたら置かれた防止柵や立看板などである。大学は車の乗り入れ禁止に努力されているが目立って改まったと思えない。

今や地球規模での環境破壊が懸念され、その1つにCO₂による地球温暖化が大問題となっている。本年12月には京都で世界的規模の地球温暖化防止会議が開催され、そこでは2,000年以降のCO₂の排出削減が図られよう。本学においてもエネルギー科学研究科が発足し、21世紀に向けての省エネ研究の体制は着々と進捗しつつある。そんな状況の中で、職員諸氏や学生諸君の中に理由もなく1人でCO₂を撒き散らしながら車で通勤、通学して来られる方がおられるのはいただけない。そのような方には環境問題を論じ、学お資格はないであろう。このことを自覚頂ければ自然と不要な車は減少し、構内はキャンパスらしく生き返る筈である。

私は決して車社会を否定する積りはない。燃料電池や更には水素やメタノール燃料で走るゼロ公害車

が実用化されるまでの僅かの我慢である。また、その間に第3キャンパスも含め駐車場の整備を図っておくことが肝要であることは言うまでもない。

同様に光熱類や情報化時代を念頭に紙などの消費量を10~15%カットすればかなりの経費が節減されよう。これを種々の環境整備に当れば大学の環境も著しく改善されるであろう。自由な学風は永遠に不滅と考えるが、21世紀に向けて環境に優しい大学もまた同時に大切である。ドイツでは小学校ですらこれらの問題への真剣な取り組みが始まっていると聞いている。ここらで本学においても挙げて省エネ、環境改善に真剣に取り組んで見ては如何であろう。

(おだ じゅんいち 化学研究所教授)

資料

平成8年度京都大学後援会助成金交付者一覧

京都大学後援会助成事業検討委員会で決定した平成8年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付者は、第1種（海外派遣）42名、第2種（海外からの学者招へい）11名、第4種（大学行政上の渡航）9名で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1類第1種（海外派遣研究員）

本学教官（若手研究者・国際研究集会にあっては、大学院博士後期課程学生を含む。）が専攻する学問分野等について調査研究のため、海外に派遣される場合に、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、派遣区分は、若手研究者・長期（10カ月）、若手研究者・国際研究集会及び1カ月である。

なお、本年度は、1カ月の特別枠として国際教育プログラム（KUINEP）リクルートミッションに5名の教官を派遣した。

派遣区分	所属部局等	職名等	氏名	主な訪問機関・国等	研究題目（国際研究集会等名）	
若	理学研究科	助手	加藤 毅	パリ高等科学研究所 （フランス共和国）	ノビコフ予想に関する研究	
	医学研究科	助手	別所 和久	テキサス大学ヘルス サイエンスセンター （アメリカ合衆国）	骨形成因子に関する研究	
	人文科学研究所	助手	瀧井 一博	ウィーン大学 （オーストリア共和国）	ドイツ・オーストリアにおける国家 学思想の展開と日本への影響	
手	国際 研究 集会 （教官）	理学研究科	助教授	矢持 秀起	アメリカ合衆国	合成金属国際会議
	理学研究科	助手	田上 高広	ベルギー王国	フィッシュントラック年代測定国際 会議	
	医学研究科	助手	賀本 敏行	フランス共和国	第10回マウスゲノム国際会議	
	医学研究科	講師	米村 重信	アメリカ合衆国	第6回国際細胞生物学会・第36回ア メリカ細胞生物学会年会	
	医学研究科	助手	伊藤 雅彦	アメリカ合衆国	第6回国際細胞生物学会・第36回ア メリカ細胞生物学会年会	
	薬学 部	助手	尾崎 恵一	アメリカ合衆国	第10回国際内分泌学会	
	工学研究科	助教授	石森 浩一郎	アメリカ合衆国	蛋白質のフォールディングと設計に 関する国際会議	
	工学研究科	助手	谷村 省吾	連合王国	第17回高エネルギー理論物理英国研 究集会	
	工学研究科	講師	MOSHNYAGA. V	スイス連邦	第11回並列処理国際シンポジウム	
	農学 部	助手	矢野 修一	イタリア共和国	第20回国際昆虫学会議	
	農学 部	助手	平松 研	香港	第2回回流体力学に関する国際会議	
	化学研究所	助手	白井 敏之	スイス連邦	第18回国際線形加速器会議	
	食糧科学研究所	助手	真野 純一	スペイン	国際フリーラジカル学会第8回2ヶ 年会	
	防災研究所	助手	近森 秀高	オーストリア共和国	水文学及び水資源管理における地理 情報システムの応用に関する国際会議	
	究	東南アジア研究 センター	助手	永田 好克	オーストリア共和国	第18回写真測量・リモートセンシン グ国際会議「画像からみた空間情報」
		超高層電波研究 センター	助手	白井 英之	オーストラリア	ウエスタンパシフィック地球物理学 国際会議
保健診療所		助手	大森 孝一	アメリカ合衆国	アメリカ春季耳鼻咽喉科合同会議	
医療技術 短期大学部		助手	池添 冬芽	マレーシア	1996年国際理学療法学会	
文学研究科		博士後期2年	田中 治子	オーストラリア	第23回国際選択体系機能言語学会	
理学研究科		博士後期2年	石田 恒	オランダ王国	第12回国際生物物理学会	
医学研究科		博士1年	武久 盾	カナダ	第11回国際AIDS会議	
医学研究科		博士2年	齋藤 通紀	アメリカ合衆国	第6回国際細胞生物学会・第36回ア メリカ細胞生物学会年会	
工学研究科		博士後期2年	田川 浩	メキシコ合衆国	第11回世界地震工学会議	
農学研究科		博士後期3年	樋口 浩和	アメリカ合衆国	アメリカ農学会、アメリカ作物学会 アメリカ土壌学会1996年集会	
者	（大学 院生）	理学研究科	博士後期2年	石田 恒	オランダ王国	第12回国際生物物理学会
	医学研究科	博士1年	武久 盾	カナダ	第11回国際AIDS会議	
	医学研究科	博士2年	齋藤 通紀	アメリカ合衆国	第6回国際細胞生物学会・第36回ア メリカ細胞生物学会年会	
	工学研究科	博士後期2年	田川 浩	メキシコ合衆国	第11回世界地震工学会議	

派遣区分	所属部局	職名	氏名	主な訪問機関・国等	研究題目(国際研究集会等名)
1カ月	総合人間学部	教授	内藤道雄	インスブルック大学等(オーストリア共和国等)	ヨーロッパ文化の交流としてのマリア崇拝の系譜
	総合人間学部	助教授	蒲池美鶴	ロンドン大学ウォーバーク研究所(連合王国)	エリザベス朝演劇批評におけるアナモルフォーズ(歪像画法)の概念の適応の研究
	文学研究科	教授	豊田昌倫	ロンドン大学等(連合王国等)	現代英語のコーパス作成に関する研究
	教育学部	教授	高木英明	シドニー大学等(オーストラリア等)	マレーシア・オセアニアにおける教育行政の比較研究
	経済学部	教授	下谷政弘	タフツ大学等(アメリカ合衆国)	国際教育プログラムに関する研究調査
	経済学部	教授	瀬地山敏	ウィーン大学等(オーストリア共和国等)	国際教育プログラムに関する研究調査
	理学研究科	助教授	大谷浩	ヘルワン天文台等(エジプト等)	相互作用銀河の活動性に関するエジプトとの共同観測研究
	薬学部	助手	澁川明正	ミュンスター大学等(ドイツ連邦共和国)	キャピラリー電気泳動の高感度検出法の開発
	薬学部	教授	本多義昭	エジンバラ植物園(連合王国)	トルコ産伝統薬物の基源同定に関する研究
	工学研究科	助教授	小寺秀俊	スタンフォード大学等(アメリカ合衆国)	マイクロマシン加工プロセスに関する基礎研究
	農学部	助教授	植野洋志	国立保健研究所等(アメリカ合衆国)	タンパク質・酵素の立体構造形成に関する研究
	農学部	教授	林力丸	メルボルン大学等(オーストラリア等)	国際教育プログラムに関する研究調査
	数理解析研究所	助教授	ULIDOWSKI, Ireneusz	中国科学院等(中華人民共和国)	並列システムの特性を証明するためのソフトウェア・プログラムである一般プロセス代数マネージャ(GPAM)の開発に関する研究
	生体医療工学研究センター	助教授	中村達雄	ナイロビ大学等(ケニア等)	人工臓器開発に関する調査研究
	留学生センター	助教授	喜志麻孝子	タフツ大学等(アメリカ合衆国)	国際教育プログラムに関する研究調査
留学生センター	教授	岡川長郎	ウィーン大学等(オーストリア共和国等)	国際教育プログラムに関する研究調査	

2. 第1類第2種(海外からの学者招へい)

海外から学者、研究者を本学に招へいし、学術活動の発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金(往復航空賃及び滞在費)を交付するもので、招へい区分は若手研究者(10カ月)及び一般(1カ月)である。

区分	受入部局	招へい学者名	国(地域)名・所属機関・職名	研究題目
若手研究者	医学部	崔宗虎	中華人民共和国・長春農牧大学実験動物センター・講師	疾患モデル動物の遺伝学的解析研究
	工学部	Ram Niwas Singh	インド・インド科学研究所講師	炭素-窒素および炭素-ホウ素化合物をホストとする層間化合物に関する研究
	防災研究所	劉俊来	中華人民共和国・長春地球科学大学・教授	岩石の変形実験による地殻のダイナミック構造に関する研究
一般	総合人間学部	顧志建	中華人民共和国・中国科学院昆明植物研究所・副研究員	日本・中国におけるイチイ科植物の進化の研究
	理学部	Rashid G. Nazmitdinov	ロシア・ボゴリューボフ理論物理研究所・主任研究員	有限フェルミ系のシェル構造に関する研究
	医学部	Wolfgang Dauber	ドイツ連邦共和国・チュービンゲン大学・教授	ヒト顎関節円板前方転位の病態解析
	工学部	Kemal Hanjalic	オランダ王国・デルフト工科大学・教授	乱流制御と伝熱促進のモデリングに関する研究
	農学部	Melchior Emeram Mlambiti	タンザニア連合共和国・ソコイネ大学・助教授	稲作発展の経済的・技術的条件に関する研究

区分	受入部局	招へい学者名	国(地域)名・所属機関・職名	研究題目
一般	農学部	陳世銘	台湾・国立台湾大学・教授	農産物品質の人工知能による管理技術の統合に関する研究
	胸部疾患研究所	Branislav Djuric	ユーゴスラビア連邦共和国・ノビサド大学・教授	サルコイドーシスに関する臨床的・病態生理学的研究
	原子エネルギー研究所	Traugot H.K. Frederking	アメリカ合衆国・カリフォルニア大学ロサンゼルス校・教授	超流動ヘリウムの定常・非定常冷却特性に関する研究

3. 第1類第4種 (大学行政上の渡航及び大学間協定校との交流)

総長及び総長が大学行政上特に必要と認められた者の海外渡航に対し、助成金を交付するものである。

所属・職名	氏名	渡航目的国(地域名)	主な訪問機関	派遣目的
総長	井村裕夫	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学バークレー校等	第10回内分泌学会国際会議出席並びに高等教育及び学術交流に関する調査
学留生部課員	馬淵光正	アメリカ合衆国	タフツ大学等	日本留学フェア参加並びに国際教育プログラムに関する弘報及び調査
庶務国際交流部課員	貝塚唯生	オーストラリア等	メルボルン大学等	国際教育プログラムに関する弘報及び調査
学留生部課員 第一留學生掛長	篠田春代	オーストラリア等	メルボルン大学等	国際教育プログラムに関する弘報及び調査
学留生部課長	太田恵雄	オーストラリア	センターポイントコンベンションセンター	日本留学フェア参加
庶務国際交流部課員 国際交流会館掛長	山本正躬	オーストラリア	センターポイントコンベンションセンター	日本留学フェア参加
経済学部教授	西村周三	カナダ	トロント大学	大学間学術交流協定に基づくトロント大学との合同シンポジウム出席
人間・環境学 研究科教授	足立幸男	カナダ	トロント大学	大学間学術交流協定に基づくトロント大学との合同シンポジウム出席
総長	井村裕夫	連合王国	教育雇用省・ケンブリッジ大学・ブリテッシュカウンシル等	連合王国における高等教育・研究機関の実情調査
総長	井村裕夫	アメリカ合衆国	コナ・ヒルトン・ピーチリゾート	日米医学協力委員会出席並びに米国における高等教育に関する調査

平成8年度教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題及び代表者等は、次のとおりである。

整理番号	研究課題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
1	ネットワーク援用講義とマルチメディア教材の開発	総合人間学部 教授 富田 博之	総合
2	総合人間学部における「高度一般教育」の現状の把握とその改善策に関する自己点検・評価	総合人間学部 学部長 三好 郁朗	総合
3	ハイパーテキストの文系研究・教育への応用	文学研究科 教授 徳永 宗雄	文
4	文学部博物館所蔵 鉄製品の復原研究	文学研究科 教授 山中 一郎	文, 法, 教, 人文, 埋蔵文化財研究センター
5	教師再教育システムの開発研究	教育学部 教授 天野 正輝	教, 高等教育
6	法学・政治学のためのAVソフトライブラリーに関する調査研究	法学研究科 教授 村松 岐夫	法
7	法学研究科における授業科目「裁判法務」の評価と展望	法学研究科 教授 鈴木 茂嗣	法
8	フィールドワーク, インターンシップとオープンネットワークの活用による大学院教育方法改善の研究	経済学研究科 研究科長 菊池 光造	経
9	学部・大学院における化学教育のための情報システムの構築	理学研究科 教授 加藤 重樹	理, 総合
10	(瀬戸) 臨海実験所における臨海実習・教育の改善と拡充	理学部 教授 石田 英実	理
11	地球流体粒子運動の3次元アニメーションの作成と教室内LANシステムを利用した講義への導入	理学研究科 教授 今里 哲久	理
12	医学における形態学教育のための三次元画像表示・解析システムと電子教科書の開発	医学研究科 教授 塩田 浩平	医, 病院
13	循環器領域における緊急時教育の充実と実践, 及び患者教育の実践	医学研究科 教授 篠山 重威	医
14	マルチデジタルファイリングシステムによる新しい消化器内視鏡学教育システムの開発	医学研究科 教授 千葉 勉	医, 病院
15	臨床系医学生に対するインターネット利用 (e-mail, home page) 環境の提供	医学部附属病院 教授 高橋 隆	病院
16	新しい医学教育カリキュラムの立案と実施	医学部附属病院 教授 福井 次矢	病院
17	薬学領域における情報処理教育の高度化	薬学部 教授 多賀 徹	薬
18	医療薬学を指向する解剖学・組織学教育の拡充	薬学部 教授 佐藤 公道	薬
19	工学教育コア-カリキュラムと教官・学生の授業評価	工学研究科 教授 万波 通彦	工, 高等
20	工学教育における情報メディアの活用の在り方に関する研究	工学研究科 教授 富田 眞治	工
21	森林における野外データの収集および解析に関する教育法の改善	農学部 教授 川那辺三郎	農
22	水産生物標本館登録魚類データベースの構築と公開	農学部 教授 坂本 亘	農
23	実習教育のための視聴覚教育用資料の作成とその役割に関する研究	農場 教授 矢澤 進	農場
24	画像メディアを用いた森林自然環境教育ソフトの開発	演習林 教授 大畠 誠一	演習林

整理番号	研 究 課 題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
25	演習林における森林情報管理システム構築による教育研究環境の整備	演習林 教授 竹内 典之	演習林
26	大学院教育における仮想現実感システムの利用法に関する研究	人間・環境学研究科 教授 江島 義道	人間・環境, 病院
27	環境情報解析に基づく地域研究に関する大学院教育および研究体制の整備	人間・環境学研究科 教授 田中 二郎	人間・環境, 東南アジア
28	エネルギー科学教育体系整備についての調査研究	エネルギー科学研究科 教授 池上 詢	エネ科, エネ研, 原子炉
29	京都大学における放射性同位元素等利用技術, 安全取扱に関する教育プログラムの構築	放射性同位元素総合センター センター長 武部 啓	放同セ, 医, 薬, 工, 農, 人間・環境
30	情報メディア教材作成支援システムの研究	情報処理教育センター 助教授 藤井 康雄	情報処理, 工
31	地球環境問題と21世紀の社会像—京都大学はどう取り組むか—	生態学研究センター 教授 安部 琢哉 (京大環境フォーラム事務局長)	生態学, 総合, 理, 医, 工, 農
32	大学教育の個性化を進めるための集会の実施	高等教育教授システム開発センター 教授 梶田 勲一	高等教育
33	マルチメディア教育支援システムによるコメディカル教育改善の研究	医療技術短期大学部 教授 中井 義勝	医短, 病院
34	留年学生に対する厚生指導のあり方に関する調査・研究	学生部 部長 益川 敏英	学生部, 教, 保健管理センター
35	外国人留学生の教育・生活及び意識に関する総合的実態調査	留学生センター 助教授 森 真理子	留学生セ
36	京都大学における外国語教育のマルチメディア化に関する調査研究	総合情報メディアセンター 設置準備室 総合人間学部 助教授 東郷 雄二	総合情報メディアセンター設置準備室
37	情報メディア環境の構築のためのシステム学的研究	総合情報メディアセンター 設置準備室 工学部 教授 美濃 導彦	総合情報メディアセンター設置準備室
38	留学生(短期)の日本理解及び科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館長 長尾 真	図書館
39	全学共通科目の学習に必要とする参考図書および大学院生の研究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館長 長尾 真	図書館
40	マルチメディア施設整備	総合情報メディアセンター 設置準備室長 長尾 真	総合情報メディアセンター設置準備室
41	病態解明と臨床応用に向けた粘膜免疫のリアルタイムモニタリング方法と新規抗原キャリアシステムを用いた経口からの抗原投与による, 臓器特異的免疫制御法の開発に関する, 学内四施設共同研究	医学研究科 教授 北 徹	医, 生体医療
42	向神経性遺伝子導入ベクターの開発	薬学部 教授 河合 明彦	薬
43	一斉開花時熱帯林の生物多様性構造の研究	生態学研究センター 教授 井上 民二	生態学, 総合, 理, 農
44	バイオミメティック法による骨修復材料の開発	化学研究所 教授 宮本 武明	化研, 医, 工
45	モデル動物を用いた老年期退行変性疾患関連遺伝子の検索	胸部疾患研究所 助教授 細川 昌則	胸部研
46	省エネルギー・環境保全型の高機能エネルギー・物質変換材料の創製	エネルギー理工学研究所 教授 大久保捷敏	エネ研, 工, 化研
47	特殊な機能をもつ高等菌類の遺伝子バンクの構築	木質科学研究所 所長 栞原 正章	木研, 農
48	植物生理機能性タンパク質成分の高度集積化新技術の開発	食糧科学研究所 教授 内海 成	食研, 理, 薬, 農, 化研
49	ウイルス性肝炎の発症機構の解析と発症予防に関する研究	ウイルス研究所 教授 下遠野邦忠	ウイ研, 医

整理番号	研究課題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
50	京都大学学生の喫煙・飲酒・運動などのライフスタイルに関する調査と、その結果の健康教育への利用	保健管理センター 所長 森下 玲児	保健管理セ、保 診
51	京都大学における加速器科学総合推進計画についての調査研究	工学研究科 教授 今西 信嗣	工、理、医、放生 研、化研、エネ研、 基礎研、原子炉
52	東南アジア地域に関する研究・教育情報の交流促進に向けたコンピュータネットワーク機能の強化	東南アジア研究センター 所長 坪内 良博	東南アジア
53	京都大学関係史料の保存と利用における基礎的研究	附属図書館長（百年史編 集委員会委員長） 長尾 真	百年史編纂史料 室、庶務部
54	京都大学の体育・スポーツ施設に対する学生および教職員のオピニオン調査	体育指導センター 助教授 井街 悠	体育指導セ、総 合、医短
55	京都大学施設データベースの作成と景観シミュレーションの再開発への応用研究	工学研究科 教授 宗本 順三	工、施設部
56	京都大学におけるキャンパス問題についての調査研究	新キャンパス委員会委員長 農学部 教授 丸山 利輔	新キャンパス委 員会
57	21世紀の京都大学のあり方についての調査研究	将来構想検討委員会 経済学部 教授 瀬地山 敏	将来構想検討委 員会

学術研究奨励金

【人文・社会】系

研究課題	所属・職・氏名
派生の経済性と意味表示の生成を中心とした言語機能の形式的特性の研究	総合人間学部 助教授 藤田 耕司
ヒトおよびチンパンジー乳幼児の定位的操作と言語発達の連関	総合人間学部 助手 田中 真介
大和国における古代山林寺院の研究	文学研究科 助教授 吉川 真司
18世紀フランス思想における言語論の位置 —ルソーを中心に—	文学研究科 助教授 増田 真

【理学・工学】系

研究課題	所属・職・氏名
格子力学系の力学的性質と拡散的挙動の関係	総合人間学部 助教授 武末 真二
多層膜冷中性子干渉計の改良と基礎物理への応用	理学研究科 助手 舟橋 春彦
アルカリハライド結晶中の酸素分子による超放射とその制御	理学研究科 助手 芦田 昌明
自由空間中に作成したカルコゲン・クラスターの光電子分光	理学研究科 教務職員 永谷 清信
コンパクト天体における降着現象の光学観測	理学研究科 助手 加藤 太一
極低温量子固体中の化学反応の動的過程の解明	理学研究科 助教授 百瀬 孝昌
有機超伝導体の物性研究と新物質構築	理学研究科 助手 近藤 哲生
多段階電子移動を制御する有機・無機混成超分子系の設計と合成	理学研究科 助手 永田 央
π-アリアルルテニウム錯体を鍵中間体とする接触的炭素-炭素結合活性化および再配列	工学研究科 助教授 近藤 輝幸
高速パルス重水素ラベル実験装置の開発と、それを使った蛋白質の巻き戻し初期過程の研究	工学研究科 助手 高橋 聡
電界グリコシル化反応による超効率的糖鎖合成法の開発	工学研究科 助手 山子 茂

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
高圧分光手法の開発と生体高分子の立体構造解析	農 学 部 助 手 小澤 省吾
木材の多価アルコール存在下での液化と生分解性発砲体など環境適応型材料の開発に関する研究	農 学 部 助 手 姚 耀廣
結晶場の動的な変換に関する研究	人間・環境学研究科 助 手 林 直人
酸性グラファイト層間化合物の酸塩基反応による物性変化を利用した新材料創製に関する研究	エネルギー科学研究科 助教授 萩原 理加
電気複屈折法による高分子のローカルダイナミックスの研究	化 学 研 究 所 助 手 井上 正志
液晶で膨潤した高分子網目の物性	化 学 研 究 所 助 手 浦山 健治
固体二次元スピン拡散NMR法による高分子ガラスの短・中距離構造の解明	化 学 研 究 所 助 手 梶 弘典
非経験的分子軌道法によるガラスの低エネルギー振動モードの解析	化 学 研 究 所 助 手 内野 隆司
超短パルスコヒーレントX線発生の研究	化 学 研 究 所 助 手 白井 敏之
28GHz電子サイクロトロン加熱のための伝送系の構築	エネルギー理工学研究所 助 手 長崎 百伸
エネルギー材料の固液界面物性の第一原理計算	エネルギー理工学研究所 助 手 山本 雅博

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
無重量への暴露ガラット脊髄神経細胞の酵素活性におよぼす影響	総合人間学部 助教授 石原 昭彦
視細胞における新しい光情報変換系の分子メカニズムの解明	理 学 研 究 科 助 手 寺北 明久
KIR6.2/SURI遺伝子から再構築したATP感受性Kチャンネルの構造機能相関	医 学 研 究 科 助 手 鷹野 誠
哺乳類の形態形成過程におけるマトリックス分解酵素の役割とプログラム細胞死（アポトーシス）の関係について	医 学 研 究 科 助 手 瀧川 俊也
酸化的修飾による蛋白のユビキチン依存症選択的分解の分子機構の解析	医 学 研 究 科 助 手 岩井 一宏
マウス子宮内膜において着床胚により誘導される遺伝子群の解析	医学部附属病院 助 手 樋口 壽宏
重粒子線およびX線照射後の再酸化現象の時間経過の相異に関する研究	医学部附属病院 助 手 大屋 夏生
虚血耐性現象の分子生物学的解析	医学部附属病院 助 手 野崎 和彦
熱ショック蛋白110群の標的気質の同定	医学部附属病院 助 手 金子 嘉志
ソマトスタチンによる細胞増殖抑制機構の研究	医学部附属病院 助 手 山田祐一郎
薬物体内動態制御に関わるトランスボーダ群の構造・機能解析	医学部附属病院 講 師 齋藤 秀之
神経系に特異的に発現する糖錯の発現調節機構に関する研究	薬 学 部 助 手 岡 昌吾
新規インスリンレセプター（IRR）のリガンド同定の試み	薬 学 部 助 手 尾崎 恵一
オルガネラへのtRNA輸送機構の解明とRNA導入系の開発	農 学 部 助教授 福澤 秀哉
魚類の母性環境情報伝達因子の検索	農 学 部 助 手 木下 政人
コレシストキニン放出を促進する受容体分子の単離と解析	農 学 部 助 手 都築 巧
アミノ酸化酵素における新規な補酵素TOPAキノンの生成と活性発現機構の解析	農 学 部 助 手 玉置 尚徳
プロテインキナーゼCアイソザイム選択的アゴニストの合成研究	農 学 部 助 手 入江 一浩
マウス受精卵の胚ゲノムの活性化と発生停止におよぼす卵管の影響	農 学 部 助 手 南 直次郎

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
ウシ筋肉内における脂肪前駆細胞の増殖・分化調節機構の解明	農 学 部 助 手 鳥居伸一郎
コバルト輸送タンパク質の構造と機能解析に関する研究	農 学 部 助 手 小林 達彦
高尿酸血症予防への応用微生物学からのアプローチ	農 学 部 助 手 小川 順
B細胞の分化初期に発現されるZnフィンガー因子の遺伝子単離と解析	遺伝子実験施設 助 手 縣 保年
遺伝子疾患を標的とした新機能医薬の創製（ゲノムドラッグデザイン）に関する研究	化 学 研 究 所 教務職員 奥野 恭史
地球共生系保全のための森林資源利用に関する分子生物学的研究	木質科学研究所 助 手 本田 与一
SerpinモデルとしてのOvalbuminのタンパク質工学的研究	食糧科学研究所 助 手 高橋 延行
ヒト子宮頸癌細胞の増殖阻止機能の解析	ウイルス研究所 助教授 酒井 博幸
MAPキナーゼカスケードの細胞内局在化機構の解明	ウイルス研究所 助 手 福田 真
レドックス制御分子チオレドキシンの酸化ストレス応答機構の解析	ウイルス研究所 助 手 増谷 弘
FtsH蛋白質の分子シャペロン機能の解析	ウイルス研究所 助 手 秋山 芳展
サル上頭頂葉皮質における身体イメージの再現様式の解明	霊長類研究所 助 手 中村 克樹

学術出版助成金

【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
Development of an Expert System Laying out a Forest Road Based on the Risk Assessment	農 学 部 助 手 吉村 哲彦

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
PLASTICITY IN NEUROMUSCULAR SYSTEM	総合人間学部 助教授 石原 昭彦

公開講座

京都大学春秋講義（春季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下で、平成9年度は創立百周年記念事業としてメインテーマ「知の最前線はいま」とし、下記のとおり「京都大学春秋講義（春季講座）」を開講します。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込んで下さい。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）テーマ『生命を考える』

開講日	講 師	テ ー マ
5月12日	理学研究科教授 佐藤 矩行	生命：共通性が支える多様性
5月19日	名誉教授 星野 一正	終末期における尊厳ある死の迎え方
5月26日	文学研究科教授 宮島 久雄	表現主義絵画にみる生の表現
6月2日	総合人間学部教授 有福 孝岳	人間存在と生死の問題
6月9日	農学研究科助教授 山田 雅保	哺乳動物発生工学の最近の話題
定員 受講料	150名 6,000円（全講義を通しての受講料です。）	

☆水曜講義

開講日	講 師	テ ー マ
5月14日	エネルギー科学研究科教授 佐和 隆光	21世紀日本の難問－閉塞の日本と勃興のアジア
5月21日	教育学部教授 竹内 洋	英国のパブリック・スクールとエリート教育
5月28日	薬学研究科教授 赤池 昭紀	老年痴呆から脳を守る
6月4日	工学研究科教授 吉田 進	グローバル情報通信の時代
6月11日	法学研究科教授 棚瀬 孝雄	日本社会と法
定員 受講料	各講義 150名 各講義 1,200円	

○会場 法経第二教室

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛
(内線 2041)

○時間 午後6時30分～8時30分

○受講資格は問わない。

話題

京都地域留学生交流推進協議会総会を開催

第7回京都地域留学生交流推進協議会総会が2月12日(水)、31団体54名の委員及び関係者等の参加の下、市内蹴上の京都市国際交流会館で開催された。

会議の冒頭に、「財団法人 京都府国際センター」及び「財団法人 母と学生の会 国際女子留学生センター」の2団体の本推進協議会への加入を決定し、当日の総会から協議に参加した。

井村議長（京都大学総長）の挨拶の後、文部省学術国際局留学生課 山下恭徳企画調査係長から「留

学生施策の最近の動向について」の説明があった。引き続き、構成団体から、留学生施策・支援の現状について報告の後、今後の活動方針について協議が行われ、①奨学援助の拡充、②生活援助の拡充、③宿舎確保の推進、④地域住民との交流活動の推進、の4つを本推進協議会の活動方針とすることを確認した。

推進協議会総会終了後、懇談会が行われ留学生交流に関する情報交換が行われた。